

海外林業研究会々員の広場

嫌われても国際協力 (3) 切り捨ても国際協力

前回、「植栽試験をするなら最後まで世話をしろ。」と書きました。今回は、「駄目なものは、さっさと切り捨ててしまえ。」という話です。一見矛盾しますが、時間も予算も人手も限られているのですから、救いようのないものを救おうとすることにより、救えるはずのものを救えなくなることは避けねばなりません。

先日、学会誌の審査をしていた若手研究者と次のような会話をしました。

「どうせまた、甘口の審査をしてるんだろう。」

「いやあ、そうなんです。こっちの指摘に従って修正してきたはずなんですけど、なんかよけい変な感じになってしまっ。」

「それはな、修正したことによって、もともとあった問題がよく見えるようになっただけなんだよ。」

「まあ、そうなんですけど。発展途上国の人からの投稿ですし、修正を要求したものですから、今更、不掲載にもしくくて…。」

「まあ、駄目なものは駄目だよな。この論文については、不掲載と明記した上で、できるだけ建設的なコメントをつけて返すしかないだろう。掲載される望みの無い論文の修正に時間を割かせるより、できるだけはやく今回の失敗をふまえて最初からやり直させるようにするのが、お互いのためだよ。」

翌日、自分の共同研究相手にメールを出しました。

試験地Aについては、今後も測定を継続していくことが必要と理解しました。そのための手配を進めましょう。しかし、試験地Bについては、試験地の管理状況も悪く、測定間隔もあいているので、当方としては継続研究としての価値を見いだすことができません。貴研究所が、今後も試験地Bに植栽された樹木を保育・管理していくことは大切と考えます。また10年後に再測定すれば貴重なデータとなる可能性がでてくるかもしれません。しかし短期間の本プロジェクト試験研究としては価値が無い以上、管理費を負担することはできません。試験地Bについては、前回の測定をもって試験結果を取りまとめ下さい。現段階では、学術論文として公表できる可能性は極めて低いので、序論や考察といった作文は不要です。将来の再測定、論文化に必要な、試験設定、測定日時、測定データについてのみ取りまとめ下さい。また、試験地Bにおいて、管理が行き届かなかったこと、再測定の間隔があいてしまった理由についても、記録にとどめ、今後、植栽試験を立案する際に参照できるようにしておいて下さい。

冒頭では、「駄目なものは切り捨ててしまえ」と書きましたが、国際協力のためには、暗がりでも切り捨てる「辻斬り」ではいけません。「市中引き回しのうえ、貼り付け獄門」のように何が悪かったかを周知徹底して、他の人が同じ過ちを犯すのを避けるようにせねばなりません。「罪を憎んで人を憎まず。」でやっているつもりですが、「罪を憎まれて人を憎む。」という反応もあります。それでも、嫌われても国際協力と信じています。(CIFOR 研究員 藤間 剛)